

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370301

研究課題名(和文) アンテベラム期米国におけるドメスティシティ、その汎テクスト的な解釈枠設定の試み

研究課題名(英文) Domesticity and Its Intertextual Comprehension in Antebellum America

研究代表者

増田 久美子 (Masuda, Kumiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：80337617

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアンテベラム期米国の小説群を中心としたテクスト分析を通して、家庭性(domesticity)という概念による19世紀アメリカの女性文化の形成を検証し、同概念の意義や役割を包括的に捉えることを目的とした。主として当時の重要な家庭性理論家であったセアラ・ヘイル(Sarah Josepha Hale, 1788-1879)の小説を取り上げ、ヘイルの企図する家庭性がジェンダー・人種・階級の問題と関わりながら「女性の領域」を拡大させ、法的・政治的権利を持たない白人女性たちに「女性市民」として社会での積極行動を可能にさせる大きな原理であったことを明示している。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the texts in antebellum America to show how domesticity configured the dominant middle-class white woman's culture, involved with gender, race, and class. Using novels written by Sarah Josepha Hale, one of the most important domestic ideologues in the 19th-century America, my project elucidates that domesticity could expand woman's sphere and their activism without any critical comments or direct accusations. Domesticity, eventually, became a rationale for white women, who had no political right but could act as what Hale calls "citizeness."

研究分野：アメリカ文学

キーワード：19世紀アメリカ小説 19世紀アメリカ文化と女性 家庭性

1. 研究開始当初の背景

(1) 家庭性とは、社会的に不可視とされてきたアメリカ女性の存在を可視化しようとする作業に付随する言説として、1960年代の女性史研究の分野から提示された指標概念である(Barbara Welter, 1966)。その後、アンテベラム期の白人女性によるテキスト研究が本格化するなかで、「男女の領域分離主義」(separate spheres)や「感傷の文化」(culture of sentiment)等の強力なイデオロギーとともに、その文化的・政治的意義の再考および再解釈が試みられるようになった。たとえば、メアリ・ライアンは「家庭」の創出が国家建設事業と併走的関係にあることを示唆し(Mary P. Ryan, 1985)、また、エイミ・カプランはアメリカ国外における帝国主義の先鋭化と国内での家庭性の涵養との間にみられる共犯性を指摘している(Amy Kaplan, 2002)。このような研究動向において、本研究代表者は白人女性による小説や歴史記述のテキストを通し、植民地主義をもたらす文化的現象が、19世紀アメリカ社会における家庭性イデオロギーの受容過程と同期的な関連性をもっていたことを考察してきた。公的領域から隔絶されていたはずの女性たちが、じつは家庭という私的領域を礎石にすることによって、リベリア植民問題、奴隷制廃止運動および人種問題等といった社会問題について自らの政治的主張を唱道していたことが判明された。

(2) 本研究代表者は、平成20年度科研費若手研究(B)の研究課題「アメリカ文学におけるドメスティック・イデオロギーの流通と定着、多様性について」(課題番号:20720077)の助成を受けたことにより、分析対象を「中流階級の白人女性作家」に限定されていた従前の研究のあり方に異議を唱え、黒人男性作家のテキストにみられる家庭性の分析を試みた。家庭の秩序を基盤とした母親的・政治的言説によって社会改革が志向される家庭性イデオロギーが、公的権力を持たないとされた白人女性たちの特殊な権能なのだとすれば、黒人男性がそのイデオロギーを利用したのはなぜなのか。そのような問題提起のもと、テキストにおける黒人家庭が人種暴動を契機に人種闘争の場と化し、また、ここに成立する「黒人の家庭性」という概念がアメリカ的市民性の獲得のための布石であると分析され、新たなアメリカ黒人像が提示された。

(3) 本研究代表者は、平成22年度科研費若手研究(B)の研究課題「米文学におけるボーディングハウス研究およびドメスティシティの概念構築に向けて」(課題番号:22720110)が採択されたことを機に、これまでの研究において看過されてきた「ボーディングハウス」という視座を導入することによって、より多層的な家庭性研究を模索した。本来、都市労働者や移民らの住居であったボ

ーディングハウスという居住形態は、1830年代には白人中流階級層にも波及し、都市部における新たな生活空間として受け入れられていた。だが、その存在はしだいに「家庭」の形成にとって大きな脅威とみなされるようになり、ボーディングハウスは多数の家庭小説作家によって否定的にテキスト化されていった。そうした背景において、本研究代表者はセアラ・ヘイルの小説を中心にボーディングハウスを「家庭」の対立項として位置づけ、家庭性の分析を行った。その結果、家庭性イデオロギーを基軸にした19世紀アメリカの中流階級文化にみられる性差領域の交差性、すなわち「女性の領域」であるはずの家庭に男性が執着することの必然性と、「男性の領域」とされていた政治思想上の論争に女性が参入することの可能性が明らかにされた。

2. 研究の目的

(1) 上記の研究背景にみられるように、家庭性にかんする研究は一定の成果が蓄積されてきたが、それはあくまでも個別のテキストに埋め込まれたイデオロギー性をそれぞれ抽出するにとどまっていた。そこで本研究では、その個別の分析作業を継続して行い、個々に引き出される論点をさらに精査し、それらを統合することによって、家庭性の包括的な概念の構築および定義づけを目指すものとした。とくに、セアラ・ヘイルを中心とした女性作家たちの著作から、「女性の領域および女性の影響力の拡大」にかかわる論点を具体的に引き出し、次の4つの視点からテキストを検証することとした。すなわち、①家庭管理小説にみられる家事労働と移民使用人問題、②女性の演説文化とそれに付随する女性の公的活動の問題、③アメリカ南部の奴隷制と自由労働、およびリベリア植民プロパガンダ小説にみる植民地主義思想、④女性による歴史記述である。

(2) 「家庭性」という言説のイデオロギー性を分析するにあたり、家庭小説を中心とした女性作家によるテキストのみならず、当時の新聞や雑誌等の出版物も幅広く検証し、アンテベラム期米国における家庭性イデオロギーの全体像を把握することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 上記「研究の目的」①について、家庭小説の下位ジャンルとして位置づけられる「家庭管理小説」(housekeeping tales)には、当時の家内賃金労働や使用人問題が反映されていると考えられる。ヘイルの小説にみる「女主人と使用人関係」を中心として、中流階級家庭内で構築される階級の意味や、家事労働力のおもな担い手であったアイルランド系移民の問題を視野に入れながら、家庭管理や家事労働にみる家庭性の意義を検討し

た。したがって、「家庭管理小説」に区分される小説のみならず、当時の女性誌に掲載された同テーマの物語やエッセイ等の分析のほか、アメリカの家事労働やアイルランド系移民にかんする歴史背景も調査した。

(2) 上記「研究の目的」②について、アンテベラム期に数多く存在した女性講演家が、家庭性の視点からどのように言説化されるのかを論証するために、まずは「女性の領域」の逸脱と女性による公的活動の意味を明らかにした。その際、19世紀の演説文化にかんする歴史背景の調査とともに、当時、講演家として活躍したグリムケ姉妹やファニー・ライト等の著作も手がかりとして、ヘイルの小説『女性講演家』(*The Lectress: or, Woman's Sphere*, 1839) を再検討した。

(3) 上記「研究の目的」③にかんして、解放奴隷の処遇をめぐる解決策として提示されたヘイルのふたつの作品を取り上げた。「ゆるやかな」奴隷解放への具体策を提起した『ノースウッド』(*Northwood; or, Life North and South, Showing the Character of Both*, 1852) と、植民運動のプロパガンダ小説とみなされている『リベリア』(*Liberia; or Mr. Peyton's Experiments*, 1853) である。それぞれの論点として「南部社会における黒人の奴隷労働と自由労働」および「リベリアにおける黒人の植民活動」に着目し、自由労働や植民地主義についての記述が、家庭性の発想によって言説化されていること、また、ジェンダー上の領域分離の言説が人種上の分離主義を支持していることについて論証した。19世紀アメリカの自由労働やリベリア植民運動の歴史背景を調査しつつ、キャサリン・ビーチャーやハリエット・ストウらのテキストとの比例考察をした。

(4) 上記「研究の目的」④を検討するため、ヘイルの『女性の記録』(*Woman's Record; or, Sketches of All Distinguished Women, from the Creation to A. D. 1854, Arranged in Four Eras*, 1855) という女性伝記集を取り上げた。ヘイルのテキストを中心に、それに先行する「歴史の語り」からアンテベラム期にかけて書かれた女性たちの歴史書や伝記が、家庭性のレトリックによって記述されていることを論証した。「歴史学」の成立過程において、女性たちによる歴史記述が排除されていった事実を確認する一方、アンテベラム期における教育の場では、女性たちが歴史を書くこと・読むことに深く関わっていた点を検証するため、マーシー・オーティス・ウォレン (*Mercy Otis Warren*, 1728-1814) やエリザベス・エレット (*Elizabeth Fries Ellet*, 1818-1877) 等の女性歴史家の著作も分析した。

4. 研究成果

(1) 上記①にかんして、2014年に「分断された家庭のなかの「良妻」——セアラ・ヘイルのハウスキーピング小説に領域論的矛盾を読む試み——」として論文にまとめた。ヘイルのハウスキーピング小説 (*Keeping House and House Keeping: A Story of Domestic Life*, 1845) は、北部都市の家庭管理に欠かされた「女主人と家事使用人」について、典型的な関係性を物語る点で凡庸な小説として読まれてきたが、本研究は次の2点に着目することで、「家庭性」の問題に新たな様相を呈した。つまり、女性が家事使用人の「女主人」となることは、アメリカ最初期の社会的道徳観である「共和国理念」に抵触し、さらに19世紀的なジェンダー規範である「真の女性性」の概念から逸脱する不安も抱え込むことでもあったため、それらの理念や規範に矛盾することなく、女性の自己形成が可能となるモデルを提示したのである。次に、このテキストを性差と公私空間の関係性から再読することで、作者ヘイルは女性読者に自身の領域である家庭を管理・守護するよう説きながら、テキストはその家庭にむしろ男性こそが執着していたことを暴き出し、この点に「男女の領域分離主義」の隠匿された意図があることを考察した。

(2) ヘイルの思想的変遷を追究し、本来、女性を家庭の領域という私的空間に滞留させるはずの「男女の領域分離主義」が、なぜ逆に女性たちの公的空間への参入を可能にさせたのかを検証した。分析対象は、1827年版の『ノースウッド』(*Northwood: A Tale of New England*, 2 vols. Boston: Bowles and Dearborn, 1827) と大幅に加筆された1852年版の『ノースウッド』(*Northwood; or, Life North and South, Showing the Character of Both*, 1852) という二版の小説テキストである。ここに見いだされるジェンダー概念や人種観の差異を分析し、彼女の思想基盤が啓蒙主義的イデオロギーからヴィクトリアニズムの思想へと移行していく過程を追い、そこに浮上する「慈善」(*benevolence*) が、ヘイルのふたつの思想とふたつのテキストを結びつける鍵概念であるとの結論を得た。以上の分析結果を論文としてまとめ、2015年に学会誌に発表した。

(3) 上記③リベリア植民プロパガンダ小説にみる植民地主義思想にかんして、小説『リベリア』(*Liberia; or Mr. Peyton's Experiments*, 1853) を取り上げた。この作品は、従来、ヘイルの植民地主義思想において、北米植民地入植からアメリカ建国までの歴史をリベリアで再演しようとする白人ナショナリズムとして解釈され、また、アメリカ黒人のリベリア入植によって進展する帝国主義的な膨張の根底に、家庭性の思想が見いだされるものとして捉えられてきた。しかし本研究は、

植民運動を通して完成されていく白人男性の男性性が喪失の危機から始まる設定のあり方に着目し、これまでの解釈にたいして、次のような新たな視点を提起した。つまり、テキストにおける白人女性の不在の意味と白人および黒人の男性性の意味を分析することによって、ヘイルの植民主義的なジェンダー思想を解き明かそうとしたのである。

具体的には、白人および黒人の男性性が追求されている過程において、人種的な対照性が露呈される構造分析を試みた。すると、テキストはリベリア植民運動における黒人の男性性の形成を呼びかけつつ、その内実は、白人男性の福音主義的男性性の回復と再生を目論んだものであったことが判明した。こうした手続きをへて、そのような構造がじつは不可視の白人女性たちへの依存によって成立していたという事実をも検証した。以上の分析結果は、当時の植民運動におけるジェンダー問題の一側面を解明したという点で評価しうるものと考え、2015年に論文としてまとめている。

(4) 上記④にかんし、ヘイルの著作『女性の記録』(Sarah Josepha Hale, *Woman's Record; or, Sketches of All Distinguished Women, from the Creation to A. D. 1854, Arranged in Four Eras, 1855*) を取り上げた。これは歴史的に傑出した女性たちの伝記集であり、900頁を超える膨大なエンサイクロペディアとなっている。アメリカでは独立革命期以降、多くの女性作家たちが「歴史」に関わる作品を生み出してきた系譜がある。とくにアンテベラム期社会では、中流階級の白人女性たちによる歴史記述は「私的な」存在とされた女性自らの思考を公的に表現する手段となり、また、喫緊の社会問題を過去の事実との類推によって議論し、世論を形成する政治的媒体でもあった。本研究はそのようなテキストで論点となった女性の市民性(citizenship)に着目し、ヘイルのテキストを中心に19世紀の女性たちにとって「市民性」とは何かを追究している。

ヘイルの『女性の記録』は女性が政治領域から退き、男女の平等ではなく差異を強調した「領域」と家庭性を賛美する点で、きわめて保守的な伝記テキストと評価されてきた。だが、そこに提示された市民性の概念は、女性が法的・政治的権利を付与されずとも重要な「市民」としての役割を演じうること、また、現実的にそのような女性たちの社会的輩出を意図していたことを示唆している。保守的な「家庭的歴史」とみなされているヘイルの伝記テキストに、女性が市民という新たな公的役割を獲得しうる可能性を見いだすことによって、本研究はさらに女性が一個人としての成長と充実を目指して、「母親であること」や「妻であること」さえも否定しうる革新的な思想を読み解いた。以上の分析結果は、「完全な市民権」を放棄した19世紀の女

性の市民的行動ないし「市民性」について、その再考を促すものとして位置づけ、2017年に論文としてまとめている。

(5) 「家庭性」とは何かを概括するため、これまで取り上げてきたセアラ・ヘイルの著作およびそれに関する拙論を見直した。いずれの作品も、従来では女性が政治領域から退き、男女の平等ではなく差異を強調した「領域」と家庭性を讃美する点で、きわめて保守的なテキストと評価されてきた。だが本研究は、ヘイルの中心的思想の基盤であった家庭性が、まさにそのイデオロギーの矛盾を利用した戦略であったことを明らかにした。家庭性とは、白人女性たちに法的・政治的権利を付与せぬまま私的領域に取り込み、「リスペクタブル」な家庭の形成に従事する主婦を仕立てる身ぶりをし、しかしその一方で、女性が権利なき者であっても、社会において重要な「女性市民」(citizeness)として活動し、領域のイデオロギーに抵触することなく「女性の影響力」以上の能力を行使する可能性を示したのである。さらには、ヘイルの家庭性には、女性が一個人としての成長と充実を目指して「母親であること」や「妻であること」さえも否定しうる革新的な思想が含まれていることも分析された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

① 増田久美子「伝記テキストにおける女性市民の形成——セアラ・ヘイル『女性の記録』の家庭的歴史の語り——」『アメリカ研究』第51号、2017年、査読有、205-228頁。

② 増田久美子「リベリア礼讃——セアラ・ヘイルのアフリカ植民思想にみる男性性の危機・回復・依存——」『駿河台大学論叢』第51号、2015年、査読無、32-45頁。

③ 増田久美子「「共和国の母」から「慈悲深き帝国」時代の女性たちへ——二つの版の『ノースウッド』にみるセアラ・ヘイルの思想的変遷と「慈善」——」『アメリカ研究』第49号、2015年、査読有、135-156頁。

④ 増田久美子「分断された家庭のなかの「良妻」——セアラ・ヘイルのハウスキーピング小説に領域論的矛盾を読む試み——」一橋大学大学院言語社会研究科『言語社会』第8号、2014年、査読有、244-262頁。

⑤ Masuda, Kumiko, "Domestic Troubles: White Mistresses and 'Black' Irish Servants in Antebellum Housekeeping Novels" 『駿河台大学論叢』第47号、2014年、査読無、67-80頁。

[その他]

①増田久美子「家庭」アメリカ文化事典編集委員会編『アメリカ文化事典』丸善出版、2018年、442-443頁。

②増田久美子「大井浩二『内と外からのアメリカ——共和国の現実と女性作家たち——』『アメリカ文学研究』第54号、2018年、73-78頁。

③増田久美子「相本資子『ドメスティック・イデオロギーへの挑戦——一九世紀アメリカ女性作家を再読する——』『アメリカ学会会報』第190号、2016年、12頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増田久美子 (MASUDA, Kumiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：80337617